

『こころ』における決定論と自由意志論：イッポ リット・テーヌとポール・ブールジェとの関連で

毛利，郁子
近畿大学産業理工学部：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/2344804>

出版情報：九大日文. 33, pp.25-43, 2019-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

『こころ』における決定論と

自由意志論

—— イッポリット・テーヌとポール・ブルジェとの
関連で ——

モリウツ
毛 利 郁 子

一、はじめに

夏目漱石の小説は「反自然主義」と批判されていたが、漱石は元々作品が先にあり、主義というものは、その作品をひとつかみにして顕著にみえる特性だけを取ったものだと言ひ、その批判には動じなかつた。「創作家の態度」(「ホトトギス」一九〇八・二)の中で、

一つの作物のうちには同時に色々な主義を含んで居る場合が多い、少なくとも含んで居る場合があり得るのですから、(略)一主義に律し去る習慣を改めて、歴史的には矛盾する如くに見做されて居る主義でも構はないから、之を併立せしめて、苟しくもその作物のある部分を説明するに足る以上は之を列挙して憚らん様にしなければ、矢張り前段同様の不都合に陥る訳であります(「創作家の態度」一一二頁)

というように、作品をつくるために一つの主義ではなく、対立すると言われる主義までも用いてよいと述べている。思想的にも「イズムの功過」(「東京朝日新聞」一九一〇・七)において、一つの主義に固執することの危険性を主張している。まして人間は一つの主義で描き得るものではなく、もつと複雑なものであると考へていた。実際、「こころ」(「東京・大阪朝日新聞」一九一四・四〇八)においても、いくつかの主義、方法や理論、表現技法の粋が用いられ、複雑に絡み合い、現代の高等教育においても採用するに値する作品が作りだされている。

本論では、「こころ」において、フランス自然主義の理論的支柱であつたイッポリット・テーヌ(Hippolyte Taine, 1828-1892)の決定論の方法とともに、それを批判したポール・ブルジェ(Paul Bourget, 1865-1935)の自由意志論の両方法が用いられていることを明らかにする。それが表現されているのは「覚悟」、「恋愛」、「先生の死」の場面で、この二つの相反するともいえる主義が重なり合い、人間のこころの複雑さが描き出されている。フランス自然主義の理論、テーヌの方法は決定論であり、その弟子であつたブルジェは、師テーヌに対して反する理論、自由意志論を、一八九八年『弟子』⁽¹⁾の刊行によつて提示する。このことはフランスの文学史的事件であり、アナトール・フランス(Anatole France, 1844-1924)とブリュンティエール(Ferdinand Brunetiere, 1849-1906)の論争を引き起した⁽²⁾。それを契機とし、一九世紀中葉を席卷した自然主義文学は終焉を迎えた。

またこの決定論と自由意志論は、漱石の「文学論」、「文学の

哲学的基礎」と「作家の態度」という文学理論をめぐる島田厚と加茂章の論議にも関わっている。島田は「漱石の思想」⁽⁵⁾で、「文学論」はスペンサーなど進化論心理学派の決定論の理論であり、自由意志に関する記述はなかったが、後の二つ文学理論はジェームス心理学の自由意志論的文学理論に変化したとする。一方、加茂⁽⁶⁾は「文学の哲学」、「作家の態度」同様「文学論」にも自由意志論があり、漱石の理論は一貫していると主張する。決定論と自由意志論の問題が「文学論」、「文学の哲学的基礎」や「作家の態度」という三つの文学理論でも言及されているということである。それらは、漱石が作家活動の前半から後半に至るまで意識していた問題であり、それゆえ、それらの方法を用い「ころ」を分析することは妥当ではなからうか。文学理論で意識し続けた問題は、文学を創作するときにも用いた方法であると考えても適切ではなからうか。

まず、テヌとブルジェの決定論と自由意志論がどのようなかを明らかにし、「ころ」の「覚悟」、「恋愛」、「先生の死」の場面でそれがいかに表現されているか考察する。

二、テヌの方法とブルジェの方法

フランス文学の中で、一九世紀、ロマン主義の理想が破れた後、社会的な現実をも描こうとリアリズム文学が生じてきた。

当時の諸科学の発展によって、より科学的に、より客観的に描こうという動きである。それはフランスの十九世紀後半までフ

ランス文学の主流を占めていた。漱石が読んだフランス文学史の著作 *Modern French Literature* ⁽⁵⁾ の中でも「自然主義の興隆」として、ジュールジュ・サンド (George Sand, 1804-1876)、スタンダール (Stendhal, 1783-1842)、バルザック (Honoré de Balzac, 1799-1850)、フローベル (Gustave Flaubert, 1821-1880)、ゴンクール兄弟 (Goncourt, 1822-1896, 1830-1870)、そしてゾラ (Émile Zola, 1840-1902) へと大きな潮流を占めている。漱石自身も彼らの名に印をつけ注目している。その写実主義、自然主義の理論的指導者とされるのが、イッポリット・テヌである。

テヌの影響は日本へも及び、坪内逍遙、島崎藤村、山路愛山などに親しまれた。テヌの『英国文学史』⁽⁶⁾ は、英文学専門家にとつて、最初の入門書であった。一八八七年、帝国大学文科大学 (現・東京大学文学部) 唯一の第一期生、立花繁樹は御雇い外国人教師デイクソン (James Main Dixon, 1856-1933) のもとで『英国文学史』を学んだと証言している⁽⁷⁾。彼が三年になったとき、漱石が入学する。当然漱石も『英国文学史』を読んでいた。漱石旧蔵書には二冊の『英国文学史』がある。表紙はとれ、十頁くらいはしかなく、発行年月日は解らないが、書き込みがあり、線引きのあるものが学生時代からのものだと思われる。もう一冊は一九〇六年発行のものである。『英国文学史』はフランスで一八六四年に発刊された後、ヴァン・ローン (Henri van Laun, 1820-1896) によって一八七二年英訳され、一九〇六年再版されている。漱石は初版も再版も持っていることになる。同じ本が二冊あること自体その重要性を示している。

しかし邦訳に関しては完全ではない。英訳本で五巻 (Book I ~ Book V) であるが、そのうち Book I から Book II までが一九四九年、平岡昇訳により創元社から三冊本で発刊され、その後、Book III「古典主義時代」⁵⁶⁾が一九九八年、手塚リリ子・手塚喬介訳によって白水社から刊行されている。しかし英書の Book IV「Modern Life」と Book V「Modern Authors」については未だに邦訳されていない。バイロン (George Byron, 1788-1824) や「ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870)」、カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881)、「スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-1873)」、テニソン (Alfred Tennyson, 1809-1872) など近代の作家たちであり、重要な部分である。英文で読んだ人たちが漱石は十分理解していただろうが、日本では最後の人物まで周知されてはいなかっただろう。

ただ『英国文学史』の「緒言」は人口に膾炙されていると平岡昇は述べている。⁵⁷⁾「人種、環境、時代」の三原則をたて、「相互依存の法則」、「事象群形成の法則」を定立する。この「緒言」のわかりにくさを補うテーヌの論文がある。それは一八六六年「精神的事象における依存関係と諸条件について」⁵⁸⁾である。この論文は日本では一九五三年に瀬沼茂樹により邦訳されているが、漱石は留学中に目にした。おそらく漱石が日本人として初めて読んだだろう。英国留学中の英書購入記録一七八番 *Note on England*⁵⁹⁾の序文で英訳者 W. F. Rae がそのテーヌの論文を引用している。精神的事象は「依存関係」と「諸条件」をもつが、その関係は事物から学んだということを主張するのである。

当時、リチャード・オーエン (Richard Owen, 1804-1892) などの博物学者 (Naturalist) たちの驚異的な発見があった。「Naturalist」とは自然主義者とも邦訳できるが、博物学者という意味を持っているのである。キュビエイ (Georges Cuvier, 1769-1832)、「ジヨフロア・サン・ティレル (Geoffroy Saint-Hilaire, 1772-1884)」、そしてダーウィン (C.R. Darwin, 1809-1882) である。テーヌは彼らの発見から、その方法を学び、文学にも生かすべきだと考えた。⁶⁰⁾ 科学の方法を文学に持ち込むというその提案はフランスの若い作家たちを惹きつけたとゾラは述べている。⁶¹⁾

フランス自然主義作家の多くが当時の科学の方法を取り入れており、河内清は『ゾラと日本自然主義文学』⁶²⁾の中で、バルザックが生物学、生理学を取り入れ、博物学者が動物のあらゆる種を研究するように人間を描こうとして「人間喜劇」を創作したとし、さらにフローベルの『ボバリー夫人』には生理学的、解剖学的な人間描写があると評されると述べている。ゾラがクロード・ベルナル (Claude Bernard, 1813-1878) の実験医学を学び『トレーズ・ラカン』を書いたのは有名である。

しかし、ゾラとテーヌには違いがあった。テーヌはドイツ観念論と英国の実証主義とを結び付けようとした。ヘーゲル (Georg Wilhelm Hegel, 1770-1831) のドイツ哲学とイギリス経験論から生じた実証主義を融合させるといふ壮大な構想を立てた。ブルジェはテーヌをヘーゲル主義であるとともに、イギリスの実証主義の影響も受けたと『現代心理論集』の中で述べている。⁶³⁾ 日本でも太宰施門は、テーヌが『英国文学史』Book V での

次のように記述していると述べている。

我々は一八世紀に英吉利思想を展開した。一九世紀に独逸思想を明確にすることができる。我々の仕事は相互によって二つの精神を緩和し、匡正し、補足し、鎔かして唯だ一つにし、みんなのよく了解する文体で表現し、斯うしてそれを世界精神に仕上げることである。(太宰施門『プウルジェ 前後』高桐書院、一九四六年八月、三六頁)

ドイツ哲学の影響は後述することとし、まずイギリス経験論から生じた連想心理学派について明らかにする。島田厚が「文学論」を連想心理学派の理論としたことは前述した。この学説は一八世紀中葉、感覚あるいは観念を、外界の事物が感覚器官に作用することによって生じる大脳中の振動に対応させたハートレー(David Hartley, 1705-1757)により生理学的説明が加えられ、心理学的体系に発展し、一九世紀中葉に至り、連想心理学として、ミル父子(James Mill, 1773-1826, John Stuart Mill, 1806-1873)、ヘイン(Alexander Vain, 1818-1903)によって完成された。ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)はダーウインの進化論を取り入れこれを進化論的連合心理学に拡大した。テーヌはこの連想学派の系譜に連なる⁵⁶⁾。

特にミルの影響が顕著である。『英国文学史』のBook V「現代の作家」には「ジョン・スチュアート・ミル」(邦訳されている)についての詳細な論述がある。ミルの連合主義心理学の

理論は、厳密な要素主義で、精神は「感覚と観念」だけからなるものであると考え、形而上学的な抽象的な精神作用を認めなかった。観念は単純なものと複雑なものに分けられ、複雑なものは単純な諸観念から合成されたものである。連想の唯一の基本的な原理として、同時に生起する諸事象の諸観念は連合される傾向があるという近接性である。後、子ミルは、類似、頻度、不可分性をつけ加えた。ミルにとっては、いかなる心的全体も、合成された諸観念または諸要素の総和である。またミルは刺激対象、感覚器官、感覚体験を分けた⁵⁷⁾。

テーヌはそれを取り入れ、「小事実の理論 (la théorie des petits faits)」を作る。心理学は科学になるという。知識は事実であるからである。我々の印象、観念、記憶、予想は、身体の「震え、動き」であり、それが今現に意識している観念、感覚体験であり、それは実際に身体に起きている事実である。観念は「小事実」である。

on peut parler avec précision et détails d'une sensation, d'une idée, d'un souvenir, d'une prévision, aussi bien que d'une vibration d'un mouvement physique. (...) De tout petits faits bien choisis, importants, significatifs, amplement circonstanciés et minutieusement notés, voilà aujourd'hui la matière de toute science. (印象、観念、記憶、予測は身体の震え、運動と同じであると正確に精密に語ることができる。(略)小事実、よく選ばれ、重要で意義深く、詳しく本質的で、精密に書かれたものが、今日のあらゆる

心理現象である観念を、現に脳が体験している「事実」とし、人間精神（自我）を心理的機械とみなし、そこに見いだされる心理的な「意義ある小事実」、それは観念であるが、それに着目し、それを分析、再建する。それらはすべての科学の材料になるのである。すべての科学、それには文学も含まれている。

この「小事実」*little facts* (*petits faits*) は、漱石「文学論」のFと関係している。漱石は「文学論」で文学的内容の形式をF+fと表現している。Fは焦点的印象または観念であり、fはそれに付着する情緒とする。Fのみのものは三角形のような情緒を欠くものという。テーヌは科学と文学を同列のものと考え、すべてを *petits faits* とし区別を設けなかったが、漱石は文学は科学の印象と観念とは異なると考え、違いを表現するためにfを付け加えたのである。

たしかにその点ではテーヌと異なるが、漱石の理論を連想学派と考えてよいのは「文学論」の次の表現で明らかである。

吾人がFを焦点に意識するとき、之に応ずる脳の状態に在りと仮定し得べし。而してFのFに推移するとき、Cも亦之に応じてCに推移するは疑ふべからず。(略) 而してCは何等の刺激(内、外)なくしてCに移るの理由なきが故に、Fを生ずる必要條件はCとS(刺激)とに帰着すべし。(略)

其うちより尤も優勢なるものもしくはFの傾向に適したるものを採用するが故に、此意味において吾人の意識焦点の推移は暗示法に支配せらると云ひ得べきに似たり。如何となればFは突然としてFを追ふて、焦点に上がるものにあらず、吾人が明瞭に之を意識する前既に幽かに暗示せらるるが故なり。(「文学論」四二六、四二八頁)

漱石は、刺激S、脳C、焦点意識Fとを区別し、刺激によって脳の状態が変化し、次の意識が生じている。Fは脳Cが刺激によって何らかの意識をしている状態である。Sはミル流に言えば刺激対象、Cは感覚器官、Fは感覚体験である。感覚体験はテーヌの *petits faits* になるのでFは *petits faits* と同じである。そしてまた新しい刺激が生じて、脳の状態は変化し、新しいFが生じてくる。そのようにして、その観念は連想する。

余の説を以てすれば、凡そ文芸上の真を發揮する幾多の手段の大部分は一種の「観念の連想」を利用したものに過ぎず。(「文学論」二五六頁)

漱石がいう脳Cにある焦点意識Fは、刺激Sが脳Cに働きかけ脳CになりFはFに推移するのであるが、それにはFの傾向に適したものを選ぶため暗示法に支配される。Fの傾向とはその個人特有の性向である。連想学派の問題はある観念が次の観念へどのように移行するか、そこにどのような法則があるのか

ということであった。その推移は「文学論」では「暗示」によって連鎖する。テーヌは連想の結合の仕方原因と結果を選ぶ。

Un analyste de l'école de M. Taine aperçoit dans cet effet, comme dans tout autre, l'aboutissement d'une série de cause partielles qui, elle-mêmes, sont des effets, par rapport à d'autres causes dominatrices, et ainsi de suite indéfiniment (テーヌ氏の学派の分析は、他と同じようにその結果の中に、それ自身支配的他の原因との関係によって結果である原因の連鎖の終点を見だし、そしてこのように無限に続く。拙訳) (Paul Bourget, (1924), "M. Taine L'âme humaine et la science" *Essais de psychologie contemporaine*, Paris: Plon, p. 233)

小事実は一本の幾何学の線のように連鎖し、結果が原因であり、それがまた結果になる。前後の観念の関係は、因果関係である。そして無限な過去からの連鎖であり、現在という焦点意識となる。テーヌの理論は現在が過去から決まってしまう決定論になる。

漱石の「文学論」では「暗示」によって連鎖する。テーヌのようにならぬ連鎖ではない。「暗示」(Suggestion)はミルに影響を与えたスコットランド学派が、「連想」という言葉の代わりに好んで用いたもので、接近と反復に、連想の他の条件「鮮明さ、強度、最近性」が付け加わったものである⁽⁸⁾。この学派にはトマス・リード (Thomas Reid, 1710-1796)、『テューガルド・ステ

ユワート (Dugald Stewart, 1753-1828) がいるが、彼らは連想の枠は維持した。ミルも「暗示する観念 (the suggesting idea)」、「暗示される観念 (the suggested idea)」という言葉を使った。つまり漱石の暗示も連想学派の中の理論である。英国留学中のノートにも「Suggestion」の項目がある。

島田厚は「漱石の思想」で「文学論」は究極において決定論に陥ったスペンサーやバインをはじめ、その亜流哲学者や進化的連合心理学派の立場であり、それはまた、ゾラやモーパッサンら自然主義の立場であり、連想心理学の立場であったと述べた。それは「心理学上の生理学主義」であり、テーヌの立場である。テーヌは連想の関係を因果関係に求め、漱石は暗示に求めるという違いはあるが、島田が言うように、漱石も決定論を採用したのである。

テーヌは、人種、環境、時代の三原則を定立し、観念の連鎖も因果関係にあり、それらに人間は決定されるとし、ブルジョアに言わせれば、「必然性の王国」を作り上げる。『弟子』の中でテーヌに比されたアドリアン・シクストは「魂の中においては一切が必然的である、自分が自由であると思ひ誤ることさえ必然的である」と語るのである。

そのようなテーヌ論に対して批判を行ったのがポール・ブルジェであった。一八八三、八五年の『現代心理論集』の中でフランスの観察派 (写実主義、自然主義) の作家たちが環境の模写ばかりをすることで、人間の意志の研究がおろそかになり、宿命に対抗できない人間を描き、ペシミズムをもたらしたと批

判した⁽⁹⁾。一八八九年に刊行された『弟子』では「序文」で自由意志を持つとフランスの青年に呼びかける。環境に負けない意志の力を呼び戻せと、力強く宣言する。そして本文ではモラル問題を提起する。

またウィリアム・ジェームズ (William James, 1842-1910) の理論も自由意志を主張する。ジェームズはスペンサーの自然科学が人間を因果関係によって機械的に説明しようとする立場、決定論に疑問を抱いた。スペンサーは社会進化論、自然淘汰による適者生存を人間社会に適用し、能力の高いものが生き残るとし、生物の環境への適応を重視した。しかし環境からの刺激は一義的ではない。それへの対応のしかたを考慮するものとして「ころ」というものが進化してきたと考えた。ジェームズはスペンサーがころを環境からの刺激に対応するだけの受動的な存在としか見ていないと批判するようになった。たしかに生物としての人間は環境に規定される面はあるが、一方で人間には意志を自由に働かせて自ら行動を選択する余地が残されているとして意識の自発性、独立性を主張した⁽¹⁰⁾。漱石が影響を受けたことは多くの論がある。

以下、「ころ」においてどのようにこの両方法が用いられているか考察する。

三、「ころ」における決定論と自由意志論

1、「覚悟」

「先生の遺書」の場面で、Kと「先生」の考え方、感じ方が描かれる。テーヌ『英国文学史』では、「人種」であり、漱石「文学論 第三篇「文学的内容の特質」」の項で次のように記されている箇所である。

或人にはAなるF他のFよりも優勢にして、常に其の意識の頂点に位し、又或人にありてはBなるF凡て他のFを凌いで高く其上に位す。其原因に至りては固より種々雑多にして約言し難しと雖も、要するに個人の遺傳的傾向即ち組織状態、或は個人一体の性質、或いは教育、習慣、職業及び其の生活境遇等その主要のものなるべし。(「文学論 二一 六頁」)

この時のFは文学的内容であるからF+fと考えるもよいと思われる。それでは「AなるF」「BなるF」の違いはどこから生じるか、それは生まれつきの遺傳や教育、環境などからである。すなわちその個人の育ち、環境などによって、その人がもつFすなわち印象と観念が違う。人により感じ方、考え方が異なるということである。それがFの傾向である。例えば、Aの人は悲しいことばかり考え、Bの人は楽しいことばかり考えるなどである。

これに則し、KのF、Kの考え方、感じ方、Kの性格が描かれていく。Kは中学にいた頃から、宗教や哲学など難しい問題で「先生」を困らせるほど思想に興味を持っていた。これは彼

の生まれつきなのか、父の感化なのか、または自分の生まれた家、寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのかと、思想を好む傾向が描かれる。さらに寺に生まれた彼は、常に「精進」という言葉を使い、彼の行動動作は尽くこの「精進」の一語で形容されるように、「先生」には見えた。Kは一途に自分の道を歩くものとしてのFの傾向を持つ。

それはまた「養家事件」を通して、助長される。道のためなら、養家をだましても、生活に困ろうと、Kは一途に自分の思いを貫いた。日常生活や「養家事件」を通して、自分が希望すること、決めたことを、必ず実現する「頑固」というKのFの傾向、考え方、感じ方が示される。

次に「先生」の考え方、感じ方も生まれから描かれる。裕福な家に生まれ、鷹揚な面もあったが「物を解きほどこいて見たら又ぐるゝ廻して眺めたりする癖」は、もう母の死の場面でも、ちゃんと備わっていた。「先生」のFは、物事を疑り深く、なにことも過剰なまでに神経をとがらす傾向がある。両親に早く死なれ、叔父に裏切られたということがさらにこの傾向を増幅させ、人を疑いやすくなる。「養家事件」や「叔父に裏切られる」というエピソードも二人の性格を助長することになり、この事件への暗示となる。

そのような二人がお嬢さんを巡って争う。先に「先生」に告白したKには「平生の主張はどうするのか」「精神的に向上心のないものはばかだ」と責め立てる。そうするとKは「覚悟：覚悟ならぬことない」と返事をする。

そうして物事をぐるぐる考える「先生」のところで葛藤がおこる。Kが一途に自分の「道」を歩き、精進してきたこと、その宗旨には、女性との「恋」さえも妨げになるということから、当然「お嬢さんとの恋を諦める」ということが連想される。KのFの傾向が暗示したことである。

ところがよく考えると「養家」事件で明らかになったようにKはなにことも思い通り、どのような障害があろうと進む「頑固」な性格だということから「覚悟」は「お嬢さんへ向かう」ということではないかという強い観念が「先生」のところにわき起る。これもKのFの暗示があるのである。

そして前観念と後観念は「先生」のころの中で戦いあう。このようにあれかこれかぐるぐる考えをめぐらすのも、「先生」の感じ方、考え方がもたくなっていく。「先生」はころころの中でその二つの観念をめぐって「煩悶」「懊惱」する。

このことは「英国留学時のノート」では「Struggle F」である。Fの戦いとはなにか。「文学論」には次のように書かれている。

- (一) 吾人の意識の推移は暗示法に因つて支配される。
- (二) 吾人の意識の推移は普通の場合に於て数多のFの競争を経る。
- (三) 此の競争は自然なり。又必要なり。此競争的暗示なき時は
- (四) 吾人は習慣的に又約束的に意識の内容と順序を繰り返

すに過ぎず。

推移は順次にして急劇ならざるを便宜とす。

(六)(五)

推移の急劇なる場合は前後両状態の間に対照あるを可
とす。(『文学論』四三四頁)

この部分は島田厚と加茂章が決定論か自由意志論かで意見が
分かれた箇所である。この箇所では「競争的暗示」であるから
「暗示」のある観念が、競争し、どちらか優勢なものが勝ち残
る。人間であるからにはいくつかの連想する観念が出現する。

この「競争的暗示」は「文学の哲学的基礎」の「自由な選択」
とは明らかに異なる。「暗示」という語があるかぎり、決定論
の範囲に入るのである。先述した(六)に、両観念が「対照」であ
ってもよいと言っているように、「お嬢さんをあきらめる」「お
嬢さんとの恋に進む」と反対の観念の争いであると考えてもよ
い。自由意志であれば、前観念と後観念の間になんらかの関係
がないものである。単なる「競争」に自由意志を求めることは
出来ない。もちろん他の箇所でも「文学論」には自由意志が述べ
られている可能性もあるが、この部分では決定論である。

この「競争」についてテーヌも言及している。「スタンダー
ル論」⁽⁴⁾これは瀬沼茂樹訳で邦訳もされているが、その中で、
『赤と黒』の「彼女(レナール夫人)がジュリアンについて、ま
た彼を愛する幸福について、いだいていたやさしい心像を、こ
ういう観念(不倫)が曇らせようとしていた」という箇所を評
してテーヌは次のように言う。

この哲人(スピノザ)と社交家(スタンダール)とは、ここで
意気投合して、観念の領域においてこそ情熱の戦いがおこ
なわれるのだと、相ともに証明したことであろう。希望を
持ちながら苦悩したりすることは、交互に相反する二つの
考えをもち、第一の考えを保持しようと努めながら、第二
の考えの思いがけない激しい出現を感じることである。心
は幼児のようなもので、恐ろしい光景を見ると、両眼を隠
そうと、つないでいた手をふりきろうとするだろう。(テー
ヌ「スタンダール」『文学史の方法』瀬沼茂樹訳、岩波書店、一九五三
年一〇月、一三〇頁)

ジュリアンを愛する観念と不倫を厭う相反する観念が生起
し、それらがところで闘争する。人が悩むという現象を観念間
の闘争として説明する。連想学派のミルが精神を感覚と観念の
みで構成されるとし、超越的な自我などを排除したということ
をテーヌはスタンダールが証明したと喜んでいたのである。ス
タンダールもこの科学を知り、彼の著作は動く心理学であ
るとテーヌは述べる。またブルジェは、

われわれの「自我」は絶えず生成し解体しつつある現象の
束のようなもので、したがってわれわれの精神的存在の表
面上の統一性は、複雑で異質な、時には猛烈に闘争し合う
までに相互に異なつたさまざまな個人の連続体に解消さ
れると見なす、あの心理学説(テーヌ)の生きた証明であ

と評している。そして観念と観念とがただ単純に連想するだけではなく、反対ともいえる観念がこころの中で闘争することもある、それが人間の自我である。観念は単純に推移するともいくつかの観念が争うこともある。そのようなこころの科学を漱石は一つの理論として取り入れたのである。人が悩むという状態を説明する必要があるだろう。

「覚悟」の意味をめぐって「お嬢さんを諦める」と「お嬢さんに向かう」という二つの観念がこころの中で闘争する。「煩悶」「懊惱」する。そして「お嬢さんへ向かう」を選択する。

この選択は「自由意志」であろうか。たしかにどちらかを選択したから自由ともいえようが、この選択は偶然ではない。「先生」というFの傾向、叔父に裏切られ、人を疑う傾向が選ばせたのである。生まれつき、あれこれ人のこころの中を考える人間であつたし、叔父に財産のことで騙され、さらにその傾向が助長されている。もし違ったFの傾向の人であれば、違った選択もあつたらうが、「先生」のFの傾向はそれを選ぶように、むしろ選ぶようなFの傾向の人物を創作した。これは決定論的方法である。

しかしそれに収まりきれない「覚悟」の意味がある。Kが「覚悟ならないこともない」と言ったとき、Kは「自殺」の覚悟をしていたのではないか。「自殺」ということは、「先生」には全く思いもよらないことであつた。K自身もはつきりしていたわ

けではない。暗示は全くないのである。KのFの傾向「精進」、「頑固」からは予測できないことであつた。ここにブルジェのいう人間心理の不可知性がある。人のこころがすべて見える、解るわけではないのである。ここにはテーヌ論を超えたもの、ブルジェの『弟子』では、人のこころを操ろうとし、人のこころを解らず、女性を自殺させてしまい、自分のこころさえ解らなかつたロベール・グレルーの苦しみ、人の心理を捉えることの難しさが表現されている。

このように決定論的方法を用いながら自由意志論の方法も織り込むのである。人間のこころとは決定論的、予測可能な面もありながら、また不可知な面もある複雑なものではなからうか。

2、恋愛について

恋愛についても両方法が用いられている。テーヌ論についてはブルジェの『弟子』に表現されている。テーヌに比されたアドリアン・シクストの理論を恋愛心理にいかした「情欲論」、この理論を実際にテーヌが書いたというわけではないが、テーヌの考え方を恋愛に適用した場合の理論である。テーヌは科学の方法、生理学の方法を文学に適用しようとした。シクストに心酔するロベール・グレルーはその理論が実験されていないので、自分が実験して、その理論の正しさを証明しようとする。当時科学は実験をして、その正当性を証明しようとしたので、なにより実験をすることが大事なことであつた。その恋愛心理

は次のようである。

第一の原理は、大部分の人間は、ただ模倣によつてのみ感情をもつている、その本来の単なる姿をそのままにして置いたら、たとへば恋愛のごとき、かれら大部分の人間にとつては、動物の場合と同じく、満たされるなり直ぐに消え去る性的本能に過ぎない、といふのです。

第二の原理はと申せば、嫉妬は恋愛に先だつてたしかに存在しうるものである。従つて、嫉妬は屢々恋愛の後に於いて残存しうるのと同様、時としては恋愛を発生させることがある、といふのです。(フールジェ『弟子』内藤濯訳、岩波書店、一九四一年七月、二一―二三頁)

恋愛はまず性的本能にすぎないということである。漱石の「文学論」の中にも「Delbert」なる人がかく云えることあり。「凡そ年若き男女が、慕ひ合ふは、彼等が自覚せずして、精子の意志に従うふものなり」、「Bain」も亦「触は恋の始めにして終なり」と云へり(「文学論」七四頁)とある。漱石も賛成し、性的本能から生じたものだといひ、ただ恋を神聖だなど、説く論者にはすこぶる妥当を欠くと賛成している。嫉妬についても「文学論」ではスペンサーやリボアの説が取り上げられる。

恋愛小説を読まなかつたら人は恋愛をしなかつただらうと決定論的方法をとる。模倣によつて感情をもち、他者の恋愛を真似て、それを嫉妬し、自分も恋愛に陥る。『弟子』では架空の

人物を想定し嫉妬させる。それによつてか、シャルロットは恋愛に陥いる。

しかしシャルロットの気持ちは最後にしかわからない。どのように嫉妬させようが、本来シャルロットに恋愛感情がなければ、恋愛に陥るべくもなく、シャルロット自殺後、自分たちはただ單純に恋をしただけだったのだとロベールは述懐し、後悔し、シャルロットを死なせたことを非常に苦しむ。

「このころ」においても嫉妬は重要な役割をはたす。Kが来る以前、「先生」はお嬢さんを確かに好きだったが、もしかして策略があるのではないかという「先生」の人を疑うF、感じ方が強く働き、まだ積極的に行ふことはなかった。しかしKがやつてきて、お嬢さんと親しげな態度をとるようになると、嫉妬し恋愛感情が激しくなる。嫉妬は多くの場面で語られる。お嬢さんとKが部屋で語り合っている場面、歌留多通りの場面、二人と一緒に帰ってくる場面などである。それによつて私の気持ちは高まつていく。しかしKが居なくなると、

是は余事ですが、かういふ嫉妬は愛の反面ぢやないでせうか。私は結婚してから、此の感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。其代わり愛情の方も決して元のやうに猛烈ではないのです。(「このころ」三三三頁)

と嫉妬もなくなる代わりに愛情も薄らぐ。嫉妬というものによつて恋愛感情を引き起こすという決定論的方法を用いる。

しかしもう一方では、

私は其人に対して、殆ど信仰に近い愛を有つてゐたのです。もし愛といふものに両端があつて、その高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いてるとすればたしかに其高い極点を捉まへたものです。(略) お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いを帯びてゐませんでした。(「こころ」一八三頁)

このように、純粹に精神的な「信仰に近い愛」も描く。全く性的側面を抜きにした精神面だけの愛も「先生」は持つのである。『弟子』でもロベールはただ単純に恋をしただけだと恋愛の不可知性、恋愛心理の精神的側面が描かれる。

恋愛とは決定論的側面と自由意志的側面をもつ不可思議なものなのである。純粹に精神的だけの愛もなからうし、性的なものだけの愛もないのではなからうか。

3、「先生」の死

死の場面でも両面が描かれる。なぜ「先生」は自殺したのか。Kの遺書は「先生」を直接的に責めることをしない。奥さんもお嬢さんも何も知らない。Kの友人や親戚とも交流がなく、本や酒なども影響しない。お金もあるので働く必要もない。環境から決定されるものは何も無い。「先生」は自分のこころの中

だけをのぞき込みKの死因を繰り返し繰り返し考える。

最後にKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくつた結果、急に処決したのではなからうかと疑い出しました。さうして又慄としたのです。私もKの歩いた路をKと同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々風のやうに私の胸を横通り始めたのです。(「こころ」二八〇頁)

この描写は自己の心理が生み出したものである。考えに考えて「淋しさ」を見いだし、そこから自分の「死」という観念を見いだす。なにか外的なものに影響された訳ではない。人間の思考が生み出したものだ。そして自殺への観念は「先生」のこころの中に入り込む。それが恐ろしい影として偶然外から襲つて来る。心理の偶発性、予測できない動きが強調されている。それは次第に外から来ないでも、「自分の胸の底に生まれた時から潜んでいる」ものようになる。人間のこころ、精神が生み出したものである。

「先生」の場合、周囲の環境は「先生」になにも責めることをしない。身近にいた奥さんもお嬢さんも友人たちも何も知らない。もし知っていたら、環境が「先生」に影響することになる。ただ自分のこころの中で苦しむのである。それは全く精神の働きのみの作用である。プルジエの自由意志論である。だが、お嬢さんのことを思い、実際には実行できずにいた。

しかし人間はどんなに孤立化しようが、社会的存在でもあつ

た。そこに明治天皇の崩御が起こる。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終わつたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其の後生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。(「こころ」二八五頁)

私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する譯が能く明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或いは個人の持つて生まれた性格の相違と云つた方が確かかも知れません。

(「こころ」二八七頁)

ここで注目すべきは「時勢」という言葉である。「生き残るのは時勢おくれ」、「自殺する理由がわからないのは時勢の推移からくる人間の相違」と繰り返して、「時勢」が二つの文の中で重要な「死」の契機となつてゐる。これを明らかにすることは、「死」の意味を解き明かすことになつてくる。『広辞苑』では「時世」は時代、世の中であるが、「時勢」は時の勢い、世の成り行きであり、「時勢」は動きを持つてゐる。

ここでテーヌ『英国文学史』「人種」「環境」「時代」の三要素の「時代」(moment)との関わりを見てみよう。テーヌは『英国文学史』「緒言」の「時代」の箇所であつたように記す。

特定の支配的概念 (Idea — 筆者注) がそこには君臨していたのである。ひとびとは二百年にわたり、または五百年にわたり、人間についての特定の理想的典型を、心に思い浮かべてきた。(略) この創造的な普遍観念は、行為と思想との全領域にわたつて表明された。しかもこの観念は無意識的に体系を形づくつてゐるその所産をもつて世界を満たしたのちに、衰微し、ついで消滅してしまつた。すると忽ち(略) 新しい観念が台頭した(テーヌ『英国文学史』平岡昇訳、一九四〇年五月、三三頁)

テーヌは印象と観念しか認めていないので、「支配的概念」と邦訳するのではなく、「支配的観念」と訳すべきである。原文に "idea" とある。ある観念がある時期行為と思想を支配していたが消滅し、次に新しい観念が生じる。やはり動きのある観念である。この「時代」について、テーヌ研究の先駆者である矢野峰人は、次のように分析する。

"moment" はヴァン・ローンの英訳では "epoch" という語を当ててあるが、これは、ある時期に於いて国家の発達が到達した特定の段階の精神、つまり時代精神を指す。然しこの語の解釈に関し色々異論を生ずるに至つた。環境と "moment" の区別は如何か(略)。テーヌは誤つてモマンをば環境から区別し分離したように思える。(略) 然し、テー

又は「moment」という語の中に一種の推進力ともいうべき「momentum」(勢)を含ませようとしていると思われるから、私は邦語としては「時勢」という訳語が比較的妥当ではないかと考える。(矢野峰人『文学史の研究』松柏社、一九五八年一月、四三頁)

テーヌの moment (時代) は、当時でも議論をよんだという。不必要ではないかという議論まであった。矢野は同じ箇所、moment は運動感、変化の意味があるので、アルバート・ゲラードがヘーゲル派とともに生成 (becoming)、あるいは「進化」(evolution) と呼ぼうと言ったと紹介している。矢野は「時勢」が適切ではないかという。まさに漱石が使った言葉である。漱石はこのテーヌの epoch をとり入れたのだろうか。たしかに英文の『英国文学史』には「face, surroundings, epoch」に漱石の線引きがある。しかし「特定の支配的観念」が支配し、減び、さらに新しい観念が出現するという表面的な内容でしかない。その理由は、前述したようにテーヌがヘーゲル主義と実証主義の折衷理論を構想したからである。ヘーゲルの主張を取り入れようとしたが、「観念」しか認めないという立場では「特定の支配的観念」という漠然とした取り入れ方しかできないため環境との区別ができないという論があつたのである。

漱石はテーヌではなくヘーゲルの主張を取り入れた。それは「文学論」の次の箇所をみるとわかる。

I 一刻の意識における F

II 個人的一世の一時期に於ける F

III 社会進化の一時期に於ける F : (三) 一世一代の F は通の所謂時代思潮 (Zeitgeist) と称するものにて東洋風の語を以てせば勢これなり。(文学論「三三頁」)

漱石は、Zeitgeist というドイツ語を時代思潮として用いている。しかもその邦訳として「勢」という語を与えている。「ところ」で用いられているのはこの「勢」である。それでは Zeitgeist とはなにか。藤尾健剛⁽²⁾は漱石旧蔵書、ポールドウィン(J. M. Baldwin, 1861-1934)の『精神発達の社会的倫理的解釈』(Social and Ethical Interpretation in Mental Development)⁽³⁾の中で何度か使われ、そのたゞに漱石の線引きがあると指摘する。漱石自身、「文学論」第五編「集会的 F」で、「諸君若し F の發育する過程」を知ろうとするなら、ポールドウィンのこの著作を参考にするがよい(「文学論」四二四頁)と述べているのである。

ポールドウィンはアメリカの発達心理学者であり、英文の中でドイツ語の Zeitgeist を用いるのはやはりドイツの思想を引用したからだと考えられる。アメリカの社会学者ミュラー (John H. Mueller, 1981-1977) が一九三五年の論文⁽⁴⁾において、Zeitgeist はヘーゲルの思想であり、一九世紀後半にわたり、ヘーゲル主義者たちがその思想を Zeitgeist として広めた」と述べている。それゆえ Zeitgeist はヘーゲル思想として西欧諸国に広まっていたことがわかる。ポールドウィンの Zeitgeist もそのような流れにおいて用いられたと考えられる。やはり Zeitgeist はヘーゲルの思想

である。

それでは漱石はヘーゲル思想を知っていたのだろうか。それは十分に可能である。漱石旧蔵書には英訳されたヘーゲルの『精神現象学』(Hegel's phenomenology of mind)とともに二冊の解説書⁽⁵⁵⁾があるからである。漱石の蔵書の中で解説書まであるのは珍しく、難解なヘーゲルの理論を学ぼうとする意図がそこに現れている。また赤木昭夫によると、漱石は学生時代、狩野亨吉、菅虎雄、正岡子規たちと哲学勉強会を行い、フェノロサ(Ernst Fenolosa, 1853-1908)が持ち込んだヘーゲル哲学の勉強もしたという⁽⁵⁶⁾。さらに漱石の英国留学中のノートで最も多く引用されているクロージア(John B. Crozier, 1849-1921)の『文明と進歩』(Civilization and Progress)⁽⁵⁷⁾にも、ヘーゲルの理論が「進歩の理論」(theory of progress)の箇所に記述され、ドイツの観念論者ヘーゲルは漱石にとって進歩的理論家として解されていた。

ヘーゲルにとって世界史は世界精神(Weltgeist)の理性的で必然的な行程である。『歴史哲学』の中で次のように記している。

各個人はその国民の子であり、同時にまた、国家が発達の過程にあるかぎり、個人はその時代の子である。何人といえども、その時代の背後に留まることはできないし、まして時代を飛び越えることなどできるものではない。この精神的本質(国民精神または時代精神―翻訳者注)は個人の所有であり個人はその代表である。(ヘーゲル『歴史哲学』上、武市健人訳、岩波書店、一九七一年二月、一三三頁)

世界史は世界精神の運動であるが、人はその時代、時代の精神に決定されて生きるほかない。時代を飛び越えることも出来ない。まさに決定論である。その時代、時代を決定するのがその時代の精神、Zeitgeistである。それが「こころ」においては「明治の精神」として表されている。「明治の精神」は明治という時代を規定し、個人を規定する。何物もその影響から逃れることはできないし、それを飛び越えることはできない。

しかも、それは推移するものである。ヘーゲルの場合、次への移行は、ただ単純な移行ではなく、弁証法が用いられる。弁証法は進歩の理論である。精神、概念はもともと完全なものではなく、肯定的なものと否定的なものを併せ持つ矛盾をもつものである。その否定的な「限界」「欠陥」が表面化したとき、それが廃棄され、いつそう高次のものへと進む(『ヘーゲル事典』弘文社、一九九二年二月、四六〇頁)。その移行は必然的であり決定的である。たしかに「明治の精神」は矛盾をもっていた。

自由と独立と己れに充ちた現代に生まれた我々はその犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう。(同上)四二頁

自由と独立と己を主張すれば、そこに「淋しみ」すなわち「孤立」に至らざるを得ない。自由と独立と己を貫いた「先生」はモラル問題を起こし、孤立してしまった。この矛盾は解消しな

ければならない。欠陥を克服し、より高次に至らなければならぬ。モラルで問題のある「先生」は否定されなければならぬ。欠陥であった「先生」は時勢の変化とともに「死」なければ進歩は起こらない。「明治の精神」が規定されたとき、「先生」の「死」は決定されていたのである。この部分に関しては、「明治の精神に殉死する」、「殉死という言葉に新しい意味」、「乃木將軍の死の評価の意味」とともに稿を改める。

（二）では *moment* も *Zeitgeist* もどちらもその時代を決定し、そこに生きる人が決定されるということと、「時勢」という動きのあるもので、「明治の精神」は「時勢」という運動においてみるべきであるということを確認する。

「先生」の死は、モラルに苦しみ、その結果このところの中での精神の働きのよつて考えに考えた末に「死」という観念を見いだしたと、それとともに「明治の精神」、「時勢」に決定された「死」であつたのである。

四、おわりに

「いころ」に関しては、多くの議論がなされた後でも、わからないことが残っているとわれている。しかし「決定論と自由意志論」との両方法で分析すると、「いころ」は、最初から最後まで綿密に計算され、エピソードの一つ一つが意味をなし、無駄なく構成されていることがわかる。

科学の方法から文学を学ぶというテーヌの提言は明治の日本

人漱石にとつて、取り入れるかどうかにかかわらず、学ぶ必要のあるものだったのだろう。留学中に読んだテーヌの著作 *Novels of England* 以降科学にかんする蔵書が増大していることが確かな証拠である。日本でも学んだテーヌの方法が当時の自然科学、社会科学、心理学、哲学との関わりのある理論であつたことを知り、そして文学というものが、科学や様々な理論との関係で創作されていることを知り、病気になるほど学んだのである。テーヌの方法もまるで役に立たないものではなく、妥当性のあるものであることを知った。

客観的観察叙述は観察力から生ずるものであつて、観察力は科学の発展に伴つて、間接に其空気に伝染した結果と見るべきであります。ところが残念なことに日本人には芸術的精神はありあまるほどあつた様ですが、科学的精神は之と反比例して大いに欠乏して居りました。それだから、文学に於いても、非我の事相を無我無心に観察する能力は全く発達して居らなかつたらしいと思ひます。（創作家の態度）
一七〇頁

科学的精神は日本では劣つていたが、西欧では科学的方法を文学にも適用していたのである。ブルジョエ自身、小説の創作をするとき、「性格の解剖」「心理の解剖」にテーヌの方法は有効で欠かすことのできないものであつた。それは自然主義者たちにとつてだけでなく、フランス文学にとつても重要なもの

であつた。

だがそれらは決定論であり、人間の自由意志を描き切れないと批判され、一九世紀末から二〇世紀にかけて、新しいブルジェたちの「精神の自由」を重視する文学が生じていた。これにも注目し、漱石はブルジェの著作を七冊所蔵していた。森田草平はブルジェの *The Weight of the Name* (家門の重圧)⁽²⁹⁾ を「先生遺愛の書」として、漱石死後の悲しみの中で手に取つて⁽³⁰⁾いる。漱石がブルジェ理論、小説を重要視していたということがわかる。ブルジェ理論の系統であるウイリアム・ジェームスの理論、ベルグソン (Henri Bergson, 1859-1943) 哲学も生じていた。漱石も興味をもち、前述した漱石所蔵のフランス文学史 *Modern French Literature* の最終章「The Warning of Naturalism」(自然主義への警告)で、ブルジェ、バレス (Maurice Barres, 1862-1923)、アナートル・フランスの名前に線引きがあることから明らかである。彼ら同時代の作家たちを叙述した *French Novelist to-day* (今日のフランス文学者)⁽³¹⁾ という文学解説書も所蔵している。

両方法が必要であるという漱石の考えは次の表現に現れる。

純乎として真のみをあとづけ様とする文学に在つては、人間の自由意志を否定して居ります。たとへばこゝに甲があつて、ある憤りの結果、これを殺す。罪を恐れて逃げる。後悔して自殺する。と仮定すると、憤りが原因で人を殺して、罪を恐れる様になつて、それがまた原因になつて、後

悔して、後悔の結果遂に自殺した事になりますから、かくの如く層そう発展してくる因果の連綿は皆自然の法則によつて出来たものと見なければなりません。(略) 所が情操を本位とする文学になると、好悪があり、評価があるんだから、篇中人物の行為は自由意志で発現されたものと判じてかゝらなければならぬ。(略) 両種の文学の特性は以上の如くでありますから、方共大切なものであります。決して一方ばかりあれば、他方は文壇から駆逐してよい杯と云はれる根底の浅いものではありません。(創作家の態度) 一六五
(一六七頁)

前者は因果の関係としてとらえていることから明らかにテーヌの方法である。後半の情操文学はブルジェの方法である。テーヌの方法を批判しつつも、無くなつていいようなものではなく、重要なものであること、両方法が大切で、必要であることを強調している。

漱石は一つの主義に固執せず、科学、心理学、哲学など学んだものを生かし人間を描こうとした。「こころ」はその成果が結果し、複雑な人間のこころ「不思議な私」を描いたものであつた。

※漱石の作品、「こころ」、「創作家の態度」、「文学論」はすべて『漱石全集』(岩波書店、一九六六年月)からのものである。

※旧字は新字に改め、ルビは適宜省略した。

【注記】

- 1 Paul Bounget (1889), *Le Disciple* Lemerc. (ポール・ブルジュ『弟子』内藤灌訳、岩波書店、一九四一年七月) 漱石旧蔵書
- 2 アナトール・フランスの主張は一八九八年、新聞ル・タン (*Le Temps*) 誌に六月三日、七月七日、九月八日の三回にわたって「道德と科学」(*La Morale et La Science*) として掲載された。一方ブルンティエールは同年の『両世界論』 *La Revue des Deux Mond* 誌に「弟子」(*Le Disciple*) を発表し反論した。
- 3 島田厚『漱石の思想』『夏目漱石』日本文学研究資料刊行会、有精堂出版、一九七七年三月、一一五頁
- 4 加茂章『夏目漱石——創造の夜明け——』教育出版センター、一九八五年二月、五〇七頁
- 5 B. W. Wells (1910), *Modern French Literature*. London: Sir I. Pimman & Sons, pp. 396-463. 漱石旧蔵書
- 6 ① H. A. Taine. (発行年月不明) *History of English Literature*. New York: Lovell. 表紙が取れているため発行年月不明 ② H. A. Taine. (1906), *History of English Literature*. trans. by H. van Laun. London: Chatto & Windus. (イッポリト・テーヌ『英国文学史』平岡昇訳、創元社、一九四三年一月、全三巻) 漱石旧蔵書
- 7 塚本利明『漱石と英国——留学体験と創作の間——』彩流社、一九八七年九月、二七頁。立花政樹が「Dixon 先生」(「英語青年」一九三三年二月号)の中で証言している。
- 8 テーヌ『英国文学史——古典主義時代』手塚リリコ・手塚喬介訳、白水社、一九九八年一〇月

- 9 平岡昇『プロボー』白水社、一九八二年一〇月、四一二頁
- 10 テーヌ「精神的現象における依存関係と諸条件について」『文学史の方法』瀬沼茂樹訳、岩波書店、一九五三年一〇月 精神的現象は「依存関係」と「諸条件」という関係をもつが、それは、事物、すなわち有機体がそのような関係をもつと同じようである。「有機体」という事物の方法を精神的現象は取らなければならない。当時「有機体」の発見でそれをとらえる方法が問題とされた。それはドイツ哲学の課題でもあった。
- 11 H. A. Taine. (1872), *Note on England*. trans. by W. F. Rae. London: Strahan
- 12 リチャード・オーエンは生物学者・比較解剖学・古生物学者。恐竜という言葉を初めて使用した。ダーウィンの進化論に賛成する面もあったが、批判もした。キュヴィエはフランスの比較解剖学、古生物学者。諸性格の関係性を明らかにした。ジョフロア・サン・ティレエルはフランスの博物学者。器官および組織の相同関係を明らかにして、動物界には共通した「構造の単一のプラン」があると説いた。次の文は一例である。
博物学者は一動物のさまざまな器官が互いに依存関係にあること、たとえば歯牙、胃腸、四肢、そのほかのいろいろな器官が、このうちのひとつが変化するならば、これにつれてほかのものも必然的に変化を起すぞうというふうな、緊密な関連をもつて、ともに変化するものであることを注意した。(この部分に注がある。キュヴィエの法則たる諸性格の関連性) 同じように歴史学者は一個人、一人種、一時代のさまざまな能力や性向が互いに結びついていること、これらの所与の能力や性向のひとつが、一人の隣人において、または接近した一団体において、先行する時期または後続する時期において、変化するときには、その全体系において、これに比例した変化を決定するというような関

- 係にあることを注意することができる。(前掲10 八二頁)
- 13 前掲9 『文学的記録』(二八八―)の「現代の批評」の中でゾラは次のように述べる。
- これまで自然主義小説に用いられた手法を精神の事象にまで広げたため、若い作家たちを惹きつけた。まさに自然主義小説と肩を並べて歩む自然主義批評であった。(四二―頁)
- 14 河内清 『ゾラと日本自然主義文学』 梓出版社、一九九〇年九月、一〇―二六頁
- 15 Paul Bouquet (1924), "M.Taine miteur". *Essais de psychologie contemporaine*. Paris: Plon, pp. 228-229.
- 16 ポール・ブールジェ 『現代心理論集』(平岡昇・伊藤直訳、法政大学出版会、一九八九年二月)の平岡昇による解説(三二―頁)。
- 17 ミッシェル・ヴェルトハイマー 『心理学史』 船津孝行訳、誠信書房、一九七一年二月、六六頁。父ミルが基本的な考え方を提出し、子ミルは「心的化学」の理論と名付けた。
- 18 前掲17、六五頁
- 19 ポール・ブールジェ 『現代心理論集』平岡昇・伊藤直訳、法政大学出版会、一九八九年二月、一九五頁
- 20 前掲17、五七頁
- 21 イッポリット・テーヌ「スタンダール」『文学史の方法』瀬沼茂樹訳、岩波書店、一九五三年一〇月、一三〇頁
- 22 エミール・ゾラ「テレーズ・ラカン」『初期名作集ゾラ・セレクション 第一巻』宮下志朗訳、藤原書店、二〇〇四年九月、二七〇頁
- ゾラは序文で次のように書く。
- 『テレーズ・ラカン』で私が観察したかったのは、性格ではなく氣質であった。そこで自由意志を奪われて、神経と血に翻弄され、人生の節目節目で肉欲という宿命に引きずられていく登場人物を選んだ。(二七―四頁)
- 23 藤尾健剛 『漱石の近代日本』 勉誠出版、二〇一一年三月、二一八頁
- 24 J. M. Baldwin. (1897), *Social and ethical interpretations in mental development*. New York: Macmillan. 漱石旧蔵書
- 25 J. H. Mueller. (1935), *Is Art The Product of its Age*. Social Force Vol. 13 No.3 Oxford University press, p. 373. アメリカの社会学者
- 26 J. M. E. McTaggart. (1896), *Studies in the Hegelian dialectic*. Cambridge University Press. J. M. E. McTaggart. (1910), *A commentary on Hegel's logic*. Cambridge University Press. ともに漱石旧蔵書
- 27 赤木昭夫 『漱石のこころ——その哲学と文学』 岩波書店、二〇一六年二月、六四頁
- 28 J. B. Crozier. (1898), *Civilization and progress*. London: Longmans, pp. 367-377.
- 29 Paul Bouquet. (1908), *The Weight of the Name*. trans. by G. B. Nes. Boston: Little Brown & Co. 漱石旧蔵書
- 30 森田草平 『夏目漱石』 筑摩書房、一九六七年三月、一一四頁
- 31 W. Stephens. (1908), *French Novelist of To-day*. London: J. La ne. 漱石旧蔵書
- (近畿大学非常勤講師)